

芸術・文化がすたれないよう イベント自粛へ即座に補償を

府職の友 本庁ニュース

発行
大阪府職労
内線3746

コロナの影響を受け、3月以降友人・知人らが出演のためチケットを入手していた演劇集団の公演、吹奏楽団の演奏会、合唱団のコンサートなどが軒並み中止となった。その日のために、休日を返上して練習を重ね、チケットを斡旋してきた苦勞が泡となった。しかし文化芸術を職としている人らは、もつと深刻だ。映画、落語、大衆演劇、文楽、歌舞伎も、上映・公演はいまだに実施されていない。収入の問題だけではなく、継続・存続すら危ぶまれる。

演出家宮本亜門さんは、「先進国でこれほど文化芸術にお金を出さないところはな。政治家の皆さんは歌も歌ったこともないし笑ったこともない、はずがない。心を和やかにし、頑張ろうと支えてくれるのが、演劇でありエンターテイメント」。落語家春風亭

昇太さんは「自粛要請後の2月末から公演中止が急増し、多くの落語家が無収入で苦しんでいる。お囃子さんも無収入。若い人がやめなにか危険する」。指揮者の沼尻竜典さんは、「文化・芸術は水道の蛇口ではない。いったん止めてしまうと次にひねっても水が出ないことがある」。4月に亡くなった映画監督の大林宣彦さんは生前「まさに映画館は必需品」と言い、ミニシアター（小規模映画館）の名誉館長も務めていた。このままでは劇場・ホール・小さな映画館が閉鎖していく、とミニシアター支援プロジェクトが動き出した。発起人は「本来は文化予算や税金でセーフティネットが作られるべき」と強調している。俳優・声優

さんも、電話や口頭でのキャンセルでは、補償のために証明できるものが無いという。一方、芸術・文化施設が多く、従事する人たちも多いベルリンでは、3月18日に新型コロナウイルス対策の「即時支援制度」を作り、27日からオン

パン島田の 異なもの 味なもの

83

ごまだし

「世界一・佐伯寿司」をキャッチフレーズに寿司の町を標榜する大分県佐伯市を代表する特産品は、もともと漁師の家で手作りされていた保存食。「佐伯の殿様、浦で持つ」と謳われたように、リアス式海岸の良港と海の幸に恵まれて栄えたが、大漁のときに魚を無駄にしないよう、いつの頃からか作られて、各家庭で受け継がれてきたとされる。

頭と内臓を外した魚を素焼きにして播鉢に入れ、骨と皮を取り除いて身を解し、炒って播り潰した胡麻と醤油を徐々に合わせて、播粉木で混ぜて仕上げる。ペースト状とすることが多いが、家庭によつては液状や団子状など様々で、砂糖や味噌、酒なども加えたり、作る手順も多少違ったりする。胡麻の酸化防止作用により冬季なら常温でも一箇月は保存が利く。(続く)

(島田祐輔)

ラインで自己申告による受付をはじめた。国籍も問われな文化・芸術は、無くても生死にかかわらないが、心は満たされ、生きる勇気を与えてくれる。ないがしろにしないで欲しい。

水曜日は
一休
自分の健康と家族のために
定時に帰りますよ!